



旧れんが工場の一部を使った「グresham アンテナショップ」。江別市と米国オレゴン州「グresham市」が姉妹都市交流の一環として行っている経済交流を活発にするためにオープンした。古いれんが建造物の利活用についてのシンボリックな存在で、店内にはグresham市のFM放送局KMHDの音楽がライブで流れ、グresham市のボイドコーヒーも楽しめる。

(住所：江別市東野幌町3番地の3／電話：011-385-6056)

北海道開拓の土木インフラ建設を素材面で支えた。だが、戦争軍事で急速に発達し、戦後復興で加速した薄く丈夫な鉄筋コンクリート建設の発達に押されて、れんが建築は徐々に減り、1975(昭和50)年以降急減した。

江別市野幌には現在、最盛期の15工場のうち、北海煉瓦合資、米澤煉瓦、昭和窯業の3工場のみが残り、1960(昭和35)年以降主流となった

「トネルキルン」で丈夫な還元性れんがを製造、道内に新しいれんが文化を構築している。

産業遺産としては、大正時代に建設された北海煉瓦合資の工場が1996(平成8)年冬に倒壊消失、1945(昭和20)年建設の昭和窯業のホフマン窯煙突も消失し、肥田製陶の煉瓦工場だけが往時の繁栄を伝えている。

れんがの大きさは時代とともに小さくなった？

明治初期のれんがの寸法は、開拓使が欧米の技術導入のために招聘したお雇い外国人の手に合わせて大きく、以後、大正・昭和と日本人労働者の手に合わせて小型化されたので、明治れんが建築は、記録がなくてもその使用れんがの寸法で年代が特定されるという個性を持つ。

大きさと年代の相関表を作成して、現地調査で活用している名物れんが博士・水野信太郎氏が野幌にいる。彼の尽力で、2004(平成16)年10月に「赤煉瓦ネットワーク」の第14回全国大会が江別市で開催され、NPO、市役所あげて、れんがのまち江別を全国にアピールした。

れんが遺産とまちづくり

江別産のれんがは現在、全国の25%のシェアを誇り、市内には江別小学校、江別第三小学校などの校舎一部が総れんが作りのうえ、サイロ、民家、倉庫など400棟以上の歴史的れんが建築、塀など約2600件の物件がれんが美を競う。

市のれんが文化中心施設「セラミックアートセンター」には、北海道のれんが史と焼き物文化の展示が充実している。

また、土管製造の全国一を誇った肥田製陶の旧工場がそのまま江別市に寄贈され、アンテナショップとなり、NPO法人「やきもの21」が活動拠点として、れんが建築の保存と活用の運動を展開している。

同法人が毎年7月上旬に開催する「えべつやきもの市」には全道300を超え、窯元などの作品が展示販売され、2日間で全道各地から10万人を集める大イベントに発展している。

Data



●お問い合わせ先
江別市商工振興課 Tel. 011-381-1023
NPO法人やきもの21 Tel. 011-391-2155